



城山

勝海舟 作

それ達人は大観す

抜山蓋世の勇あるも 栄枯は夢か幻か

大隅山の狩くらに 真如の月の影清く

無念夢想を観ずらん

何を怒るか怒り猪の 俄かに激する数千騎

勇みに勇む逸り雄の 騎虎の勢い一徹に

止まり難きぞ是非もなき

ただ身一つ打捨てて 若殿輩に報いなん

明治十年の秋の末 諸手の軍打敗れ

討ちつ討たれつやがて散る

霜の紅葉の紅の 血潮に染めど願みぬ

薩摩丈夫のおたげびに

打散る弾丸は板屋打つ

散たばしる如くにて 面を向けん方ぞなき

木霊に響く鬨の声

百雷一時に落つるが如き有様を

隆盛打見てほほぞ笑み

あな勇ましの人々やな 亥の年以來養いし

腕の力も試しみて 心に残る事もなし

いと諸共に塵の世を 脱れ出でんは此時と

ただ一言を名残にて 桐野村田を始めとし

宗徒の輩諸共に 煙りと消えし丈夫の

心の中こそ勇ましけれ

官軍これを望み見て

昨日は陸軍大将と仰がれて

君の寵遇世の覚え 比類なかりし英雄も

今日はいえなく岩崎の 山下露と消え果てて

移れば変わる世の中の 無常を深く感じつつ

無量の思い胸に満ち 只肅然と隊伍を整え

目と目を見合わすばかりなり

折りしもあれや吹き下す 城山松の夕嵐

岩間に咽ぶ谿水の 非常の声も何となく

悲鳴するかと聞きなされ

戎衣の袖を濡らし添うらん

